

ハ短調ミサ曲はどのようにして書かれたのか？

初回の「清水ヶ丘の風」はいきなりハ短調ミサ曲中のアリアの話で、スタートとしてはやや変則的になってしまいましたが、今回からは少し筋道を立てたお話にしたいと思います。

モーツァルトのハ短調ミサ最大の謎は、何と言ってもあの大曲を作るに至った動機と未完に終わった理由でしょう。これまで筆者が当たった資料ではどちらも謎のままです。色々書かれていてもほとんどが裏付けのない推測に基づくもので、否定も肯定もできない説ばかりでした。それらを紹介しながら筆者の推測も交えて皆様の参考にさせていただきたいと思います。

モーツァルトが生まれたザルツブルクは現在オーストリアの主要な都市の一つですが、彼の時代は大司教領という独立した宗教国家の首都でした。中世以来この国を治めていたのは、ローマ教皇に任命された大司教で、聖職者であると共に世俗君主としての性格も併せ持っており、街の名前の由来となった岩塩の交易で築いた富により大きな宮殿を構え、優雅な宮廷生活を送っていました。モーツァルトがその大司教の宮廷楽団に加わったのは1769年、13歳の時でした。

宮廷楽団の職務の第一は大聖堂における典礼での教会音楽の演奏です。それに加えて楽師長の地位にあったモーツァルトは典礼音楽の作曲も義務づけられていました。これは幼い頃から天才作曲家・演奏家としてミュンヘン、ウィーン(6歳)、パリ、ロンドン(8歳)、デン・ハーグ(9歳)、などヨーロッパ各国の宮廷でもてはやされた彼の経歴からも当然の責務といえましょう。

モーツァルトが作曲家としてザルツブルクの宮廷楽団のために作品を提供するのは、典礼用の音楽だけではなく、宮廷楽団の職務の第二は、宮殿で行われる様々な催しに使われる(世俗)音楽の演奏ですから、そのための楽曲提供も彼の仕事の一つです。

しかし実際に教会・世俗を問わずモーツァルトがザルツブルクの宮廷楽団のために書いた作品のほとんどは、1772年から彼がこの楽団から解雇される1781年までの間に作られたもので、69年から71年までの3年間の大半は2回に渡るイタリア旅行に費やされています。そして1771年の暮れ、モーツァルト親子が2回目のイタリア旅行から帰った翌日、彼ら親子を宮廷楽団に採用し、そのよき理解者であった大司教シュラッテンバッハが死去し、翌年3月、後にモーツァルトの宿敵(?)となるヒエロニムス・フォン・コロレド伯爵がザルツブルクの大司教に任命されるのです。

ハ短調ミサの作曲に至るきっかけとなったのはどうやらこの人事が影響しているらしいのですが、今回はスペースが尽きてしまいました。この続きは次号以降にお話しすることと致します。

【後記】

楽事通信のタイトル「清水ヶ丘の風」の命名のいわれは「私たちの声が清水ヶ丘を吹き渡る5月の風のようにさわやかでありますように」という願いを込めたものです。

お読みになってお気づきの点やご意見、ご希望、ご提案がありましたら新井までお知らせ下さい。